広島大学附属中・高等学校研究紀要
〈第48号　2001〉

手書き文字の個性の教育に関する研究（1）
――学習者相互の関わりを生かす書道授業の試み――

谷　口　邦　彦

詩文・語句探しは，「自分らしい表現」を目指した個性の教育になくてはならない活動であり，これまでの受け身の学習を主体的な学習に転換するためにも，この活動を書道の学習に位置付けていく必要がある。また，一人一人が自らの作品に良さを見出していくために，学習者相互が積極的に関わり合う場面が求められる。本稿では，自分の作品に良さを見つけ，それを洗練していこうとする段階において，学習者相互の関わりを生かす書道授業の試みから得られた成果について考察する。

Ⅰ．本実践のテーマ

本実践は，次の二つの研究に連続するもので，手書き文字の個性の教育については，特に高等学校書道におけるそれに関連する。書道授業を，より主体的で創造的な活動にしていくために，一人一人の文字の個性に気づく学習を通して改善を目指そうとするものである。

①「手書き文字の個性の教育に関する研究方向性」広島大学学校教育学部附属教育センター『学校教育実践学研究』第6巻 p. 27～p. 37（2000. 3 松本仁志，谷口）

②「新しい学びを創造する書道教育に向けての試論一高等学校書道における創作を中心に―」全国大学書写書道教育学会『書写書道教育研究』第15号 p. 51～p. 60（2001. 3 谷口）

本校の書道授業においては，これまでにも「自分らしい独自の表現」を目指した実践を行ってきた。その過程で浮き彫りになった課題を集約すると次の二点になる。

①自分で表現を見つけようとしない生徒が散見されること。

②書かれた語句が，高校生として必ずしもふさわしいものとは言えないこと。

これらの課題は，いわゆる手本を与えられるままに書き写すだけの受け身の活動から生じた結果であると考えられる。

Ⅱ．テーマ設定の理由

第1希望で書道を選択したにも関わらず，今ひとつ主体性に欠ける生徒は毎年のように散見され，こうした生徒への支援の在り方がこれまでの課題となっていた。この中には，書写力はそこそこあり，与えられた課題を真面目にこなす生徒も含まれている。こうした生徒は，いわゆる手本があれば，一定レベル以上の作品を制作できるが，進んで表現を見つけようとせず，書道の知識にも鑑賞にも興味を示さない。

「誰が」「何を」「どのように」書いたかは，書道作品を評価する際の視点である。これまでの書道授業は，「どのように書いたか」に片寄る傾向があったのではないか。今後，学習者の主体的な学習活動を授業の中心に据えた学習過程を構築していこうとするとき，「何を書く」のかという活動はもっと重視されるべきであろう。

受け身の学習を主体的な学習に転換するためには，「詩文・語句探し」を書道の学習に位置付ける必要がある。「詩文・語句探し」を学習のスタートとし，学習者相互が積極的に関わり合い，一人一人が自分の作品の良さに気づいていくことができるかを検証したい。

Ⅲ．改善の方向性

1．「主体性」に関して

新学習指導要領の「表現の構想から完成の喜びに至る過程の指導を通して，主体的に自己実現を果たしていく態度の形成を図るよう配慮する」ためには，「意図に基づく表現の構想と工夫」が求められることになる。生徒が自分から「こんな作品を作りたい」と思えるような支援の在り方を工夫していかなければならない。そのためには，生徒の思いや日常生活といった身近なところから題材を設定することも必

A Study of Teaching of Personalities Expressed through Handwriting (1)
――A Trial of Calligraphy Class Emphasizing Mutual Evaluation among Learners――
Kunihiko TANIGUCHI

要であろうし，また，書道の本質に関わる題材を深く掘り下げて扱っていく場面も必要であることは既に検証済みである。

2.　個性に関して

個性の教育については，少人数によるクラスを設定し，きめ細かな指導を通して生徒の個性を引き出そうという立場もあるが，30人なり40人なりで学習することによる効果も忘れてはならない。生徒が互いの作品を比較し，批評し合えるような場面では，人数が多いからといって学習効率が低くなるとは言えない。グループ学習を設定するなどの工夫次第では，学習者相互の働きかけが期待できよう。「自分らしさ」は，他との比較を通してはじめて認識できるものと考えている。

3.　創造性に関して

書道作品においては，「画期的」で「斬新な」作品を制作することの意味はあまりない。学習の場においては特に，誰が見ても好感の持てる作品に高めていくことを重視すべきであると考える。つまり，創造性は，出来上がった作品のみで評価するのではなく，教師も生徒も学習課程を大切にする姿勢から育まれていくものと考えている。

創造性は，ただ文字を書く作業を繰り返す学習からは生まれない。学習者一人一人が制作意図を持ち，それに向かって工夫し，互いが批評し合い，教師の的確な支援が必要になる。特に教師は，それぞれの場面において学習者にどのような活動をさせたいのかを明確に示し，資料や用具も周到に用意しておく必要がある。

生徒主体の学習とはいえ，教師の積極的な働きかけがあってこそ，創造性豊かな学習活動は展開されていく。教師は，最終的にどのような作品に仕上げさせたいのか，明確な方向性をもって支援にあたるべきであり，決して生徒任せにしてはならない。

Ⅳ．　テーマに基づく改善の具体的方法

上述の方向性にたって，「詩文・語句探し」を活動のスタートとし，制作場面ではグループ学習を設定して，活発な学習活動になるよう改善を試みた。

1.　「詩文・語句探し」を位置づける

まず，書道作品にふさわしい詩文・語句を探すよう，課題を出す。教室内で展示，鑑賞できる大きさの作品という条件をつけ，あまり長い文章は避けることを確認する。探してきた詩文・語句は，プリントに一覧で示し，グループ内で，どのような詩文・語句が書道作品にふさわしいかを検証させた（図２）。

その際，教科書に所収の作品から，本来書道はどのような詩文・語句を書くのかということも確認させるようにした（グループ毎に分担，それぞれ板書する）。

検証をもとに，再度，詩文・語句を探すように促し，教師の評価もこの時点で示すようにした。つまり，「ある程度の時間の鑑賞に耐えられるか」「新鮮な若者らしさが感じられるか」「まとまりの良い作品になりそうか」といった観点を示し，軽薄な語句は除くようにした。

2.　グループ学習の設定

４名ずつのグループを設定し，意見交換が活発になるよう，机の配置を変えた。４名は，仲の良い，気心の知れたもの同士という設定で，機械的に分けたりはしていない。グループ学習を通して，学習者相互が関わり合い，比較しながら作品を制作できるよう配慮したつもりである。

3.　制作意図を明確にするために

意見交換は，ほとんどの場面で，プリント記入という形をとった（図３）。文章にすることによって，制作意図を明確にするためである。仕上げの段階では，言葉に込められた「制作意図」と「表現」との関係を，口頭で発表する場面を設定した。

4.　作品掲示の工夫

教室後部の壁面に掲示することは，机上で鑑賞し合う時には気づかない欠点が明確になるメリットがある。授業の始めには，教師が短評を述べ，今後改善していくべき点について確認するようにした。また，全体の完成度を知ることができ，効果を再確認した。

さらに，インターネットのホームページ内に掲示し，学校外への発信ということから，制作意欲を喚起するようにした。

5.　相互批評の活性化

グループ内での相互批評の場面では，互いがプリントに批評を記入する形をとった（図４）。その際，できるだけ良い部分を取り上げるようにすることで，それぞれの作品の良さがを認め合えるようにした。

また，上述のホームページ上に掲示板を設け，自宅など，時間を気にせず批評し合えるようにするとともに，グループ以外の作品についても批評できる機会を設定しようとした（図５）。

Ⅴ．　授業の実際

1.　実施時期　2001年９月～11月

2.　対　　象　高等学校Ⅰ学年書道選択生
39名（男子20名，女子19名）

4.　題　　目　わたしの言葉・わたしの書

実践の経過をまとめると，図１のようになる。当初の予定よりも余裕のある中で実践できたが，今後

図1 「わたしの言葉・わたしの書」学習経過

日　時	学習内容・目標	学　習　活　動	教　師　の　支　援	キーワード
2001年 9月20日（木） ［5．6時限］		宿題 ・言葉を探してくる ・身のまわりの書を探してくる	・書作品にふさわしい詩文・語句という設定。	【言葉探し】 【身のまわりの書】
9月27日（木） ［5．6時限］	用具・用材の表現効果を試す。 （半紙に漢字一文字）	○用具・用材の表現効果を試す。 （薄い墨で書く・半紙を濡らしておいて書く・左手で書く・筆以外のものを使って書くなど）	・制作にルールはないことを徹底するようにする。	【用具・用材】
10月6日（土） ［1．2時限］	探してきた言葉が書作品にふさわしいかどうかを検証する。	○教科書に所収の作品に書かれている言葉をあげる。一グループで分担（9ページずつ），それぞれ板書する。 ○自分たちが探してきた言葉が書作品にふさわしいかどうかを検証する（プリント）。 宿題 ・もう一度言葉を探してくる。	・書の扱う言葉の広さを実感させるようにする。 ・検証のための基準を示す。 （鑑賞度・スタイル度・新鮮度・知的度・若者度）	【書の広さ】 【言葉の検証】 【言葉探し】
10月11日（木） ［5．6時限］	試作①（半紙）	○言葉を決める。 ○漢字，平仮名ともに書道字典（角川書店）で調べる。気に入った文字があれば使う。 ○配置を考える。 ○グループで相互批評する。 （プリントに記入）	・もう一度探してきた言葉をプリントして配布。 ・普遍的な字形が鑑賞度を高めることを理解させる。 ・散漫な配置になる生徒には，鉛筆で形を書かせる。	【（古典）】 【配置】
10月20日（土） ［3．4時限］	試作②（半切1／3）	○選んだ言葉と，表現意図が言えるようになる。 ○教室に掲示することを前堆として制作していく。 ○制作後，グループで相互批評する。（プリントに記入）	・表現が中途半端な生徒については，「読めるか読めないかの限界に挑戦させる」ようにする。	【表現意図】
11月3日（土） ［1．2時限］	試作③（半切1／3）	○個性的な作品にするためには，線質を工夫することが不可欠であることを知る。 ○集めてきた「身のまわりの書」のプリントを参考にしながら，書写における楷書の筆使いではなく，独自の線質になるよう工夫する。	・作品を教室の壁面に掲示。 ・いくつかの作品を取り上げながら，教師の評価を示す。淡墨が多いことを指摘した。 ・起筆に着目させる。 ・授業後，ホームページ作成	【線質】 【身のまわりの書】
11月8日（木） ［5．6時限］	試作③（半切1／3）	○選んだ言葉と，表現意図を整理する。 ○完成度を高めることを目標に，もう一度制作する。	・作品を教室の壁面に掲示。 ・ホームページの作成を告げる。 ・教師の書いた代案をそれぞれの生徒に示す。	【表現意図】
11月16日（金） ［4時限］	仕上げ（半切1／3）	○仕上げをする。 ○選んだ言葉と，表現意図の関係を発表し，作品を通して思いを伝える。	・作品を教室の壁面に掲示。 ・今後の学習の方向性を示す。	【表現意図】 【古典】

探した言葉	鑑賞度	スタイル度	新鮮度	知的度	若者度	合計
「やってみる」という言葉はない。「やる」か「やらない」かだ。	2	2	2	2	1	9
考えるな。感じろ。	3	2	2	2	2	11
どうせ生きるなら、生きてる事を楽しくした方がいい。	2	2	3	2	3	12

図2　探してきた言葉評価用紙

言葉と表現（用具・用材と全体構成）をどのように調和させていきたいか。

「一人旅」だけでは感じるところも少ないので、その言葉の裏にある心情を自分なりに考えてみた。それを濃さを変えたり、配置を色々工夫したりして表現した。全体的にはそれらを調和させていきたい。

図3　制作意図

〔村田　〕さんの作品を見て（表現）

字の大きさやバランス、濃さなど、とても整っている作品だと思います。風の様な感じを受けます。きれいです。

（言葉）鑑賞度： 3　**スタイル度：** 3　**新鮮度：** 3　**知的度：** 2　**若者度：** 2

図4　相互批評プリント

●管理者：王献之(798) 題名：重光の感想はこちらへ 投稿日：2001年11月7日(水)16時13分 返信

重光の感想はこちらへ

Res: 村田(902) 投稿日：2001年11月16日(金)09時58分
にじませ方が上手なので、とても風流な作品に仕上がっていると思います。配置もいいし、漢字を大きめにしてあるのでどことなくインパクトも感じられます。墨の濃さもこの位なら、遠くからもはっきり見え、作品全体の雰囲気を壊すこともないので very good！

Res: endo(664) 投稿日：2001年11月15日(木)21時24分
5nichi de konnanimo kawarunoka-!!
shinpo shiterunoga yoku wakaru!!
1ji 1ji ga ochitsuite dosshiri shiteru!!

Res: 新谷(656) 投稿日：2001年11月10日(土)05時17分
前は細くてうすい字だったけど、今回は逆のけっこう太めで濃い字になっているので、今回の方がインパクトがあると思いました。
うまい具合ににじませて丸みたいな感じが新鮮で、おもしろいなあと思いました。

Res: 末田(301) 投稿日：2001年11月9日(金)23時05分
全体的に丸味があって、今までのものとは根本的に変わってしまいました。
でもこっちも、いい。
しんにょうの最後がどっしりしてて落ちついた感じです。

Res: 関(938) 投稿日：2001年11月9日(金)22時42分
一文字一文字にそれぞれ強調しているような強い太い線が一つ入っていておもしろいと思います。「が」が二つ続いていていて両方とも同じ所が太くなっているのでその太くする場所をそれぞれ変えてみたらいいと思います。「道」のしんにょうの最後の丸味がいいです。

図5　ホームページ掲示板

は時間の短縮を図ることも可能と考えている。

仕上げの段階の，まとめの授業は，本校の研究大会において公開授業を行った。その際の学習過程と，板書を示す。授業の山場は，グループの代表による制作意図の発表の場面であったが，堂々と発表を行い，立派であった。まとめとして，それぞれの作品の良さを洗練させていくべき方向性を示した。

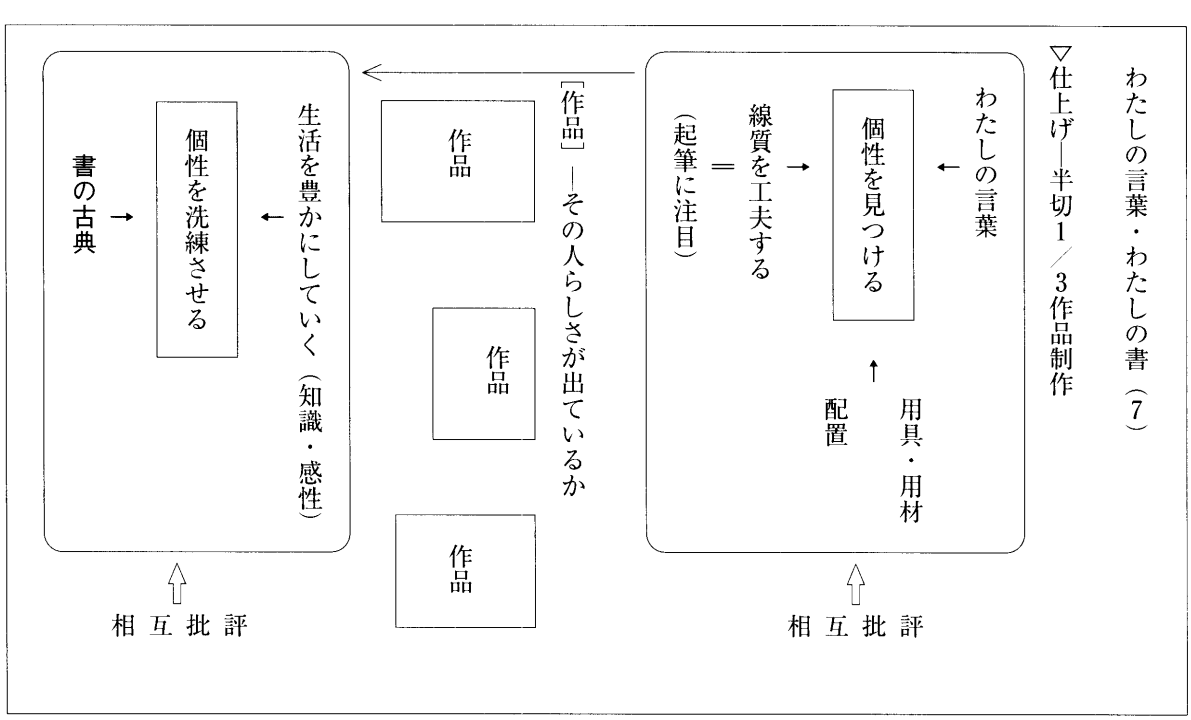
本時の学習目標

1. 表現したい意図をわかりやすく説明することができる。
2. 表現したい意図に沿って作品を完成することができる。

本時の学習過程

学　習　活　動	教　師　の　支　援
○前時の学習内容と本時の目標を確認する。 ○最終的な表現意図を明確にする。（5分） ○半切1／3に作品を完成させる。（20分） ○グループ内で完成した作品を批評し合う。（5分） ○全体で発表し合う。（15分） ○学習のまとめをする。	・前時までの経過を確認し，表現したい意図がはっきりしない ところを各自で確認させる。 ・説明できることが，明確な表現につながることを押さえる。（言葉，用具・用材，全体構成など） ・明確な表現にするためには，線質にこだわらなければならないことに触れる。 ・他の作品と比較して優れているところを見つけさせる。（プリントに記入させる） ・グループの代表一人ずつに作品を掲示させ，口頭で発表するよう促す。 ・生活との関わり，友人との関わり，用具・用材との関わり，古典との関わりなどで作品制作は深まっていくことを確認する。

板書



Ⅵ. 実践の成果と問題点

1. 「詩文・語句探し」について

夏休みを利用するなど，もう少し時間をかけて探すよう計画すべきであったが，学習を進める中で，自分の表現に合わせて変わっていくこともあり，事前に時間をとればいいというものでもないようだ。概ね自分の思いを言葉にし，表現することができたのではないか。

生徒が選んだ語句は，「歌詞」から採ったものが11名と多かったが，「前向き」な気持ちを表現しようとしたもののほかに，「もやもやした」気持ちをなんとか表現しようとするものも見られた。

永遠の風吹く場所へ	真向勝負	紅い陽炎
心打つ滝	たった一人の君を生きて	春よ来い
豪快に生きろ	天衣無縫	ずっとずっと笑っていることができましたか
心の中に永遠なる花を咲かそう	空は明日をはじめてしまう	言葉にできない
立志	相思相愛	言葉は心を越えない
若武者	月光	自己流
竜に攀じ鳳に附く	幸福	志
遙かかなたに	ぽっち	優しさだけじゃ生きられない
一人旅　何か探しに	考えるな感じろ	大根
究極	最後の幻想	無我夢中
思惟する自我	世の果てににている漆黒の羽	透明な眼で
上を向いて歩こう	夕焼け小焼けの赤とんぼ	永遠に
天誅	月下美人	無限

図6　最終的に生徒が選んだ言葉一覧

学習の場である限り，なぜその言葉を選び，どう表現したかったのか，制作意図をきちんと説明することを重視すべきであろう。最終的な作品が，本人の気に入らない場合であっても，解説を聞けばなるほどと思える場合もあった。

授業後のアンケートでは，授業を通して難しかった点について次のように答えているが，言葉探しについて難しかったと答えた生徒は少数であった。

（39名　複数回答あり）

言葉探し	3人
配置	11人
自分で表現を考えるところ	6人
線質	6人
書体（くずし方を工夫する）	5人
字形	5人
気持ちを作品に込めながら書くところ	4人
墨色	3人
新鮮さを出すところ	2人

図7　授業後のアンケートから

また，「自分の気持ちを言葉と表現に託すことができましたか」の問いには，まあまあも含め，「できた」と答えた生徒が1名を除く38名という結果になっている。ほぼ全員の生徒が何らかの意図を持って制作にあたり，自分の思いを言葉と表現に託そうとしてたことが，アンケートからも読みとれる。今回は受け身の生徒は見られず，主体的な学習活動が展開できたのではなかろうか。

2. グループ学習について

グループ学習は，協力し合って課題を解決していくためのものであろうが，今回の場合はそれが機能したとは言えない。他者の作品を意識しながらの制作は，意欲を喚起できたかもしれないが，助け合って制作していく場面は，残念ながら見られなかった。共同作品を制作するなどの配慮が必要だったように思う。

プリントに記入する形での生徒の相互評価では，なんとか良さを見いだそうとする姿勢がにじみ出ている。残念だったのは，評語を知らなかったり，評価の観点がわからなかったりして，スペースを埋めるだけに終わっている者もあった。授業の目標を明確にし，評価の観点として位置づくような配慮が欠けていたのかもしれない。

相互評価を通して作品の完成度を高めることがねらいであったが，今回はこのよう場面は見られなかった。書道に関する知識も鑑賞眼もないところからは機能しないということを再認識した。この段階では，項目を具体的に示した評価カードを用意するなど，わかりやすく記入しやすい形式を工夫すべき

だったように思う。

授業のみならず，自宅でも評価できるように，インターネットの掲示板を使ってみたが，初めての試みでもあり，成果があったとは言えない。生徒の指摘には，「作者の制作意図も載せておくべきだった」「作品を見ながら書き込みができない」などがあり，今後の工夫が求められる。インターネットに接続していない家庭もあり，また，校内においても気軽に使えるコンピュータが整備されていない状況がある。掲示板を使ったのは良いと答えた生徒は4名。良くないと答えた生徒は6名いた。

3. 作品の良さをどう洗練させていくか

生徒の学習意欲を喚起するためには，本質を追求する学習を設定する必要がある。書道の本質として考えられるものはいくつかあるが，その一つとして線質に注目し，「自分らしい」表現に生かしていこうと試みた。線質の違いを表現しようとするには，始筆の筆使いに注目することで可能になる。

書写授業においては，日常の硬筆に資する単純でわかりやすい筆使いを徹底しようとするため，画一的な線質になるのは致し方ない。書道授業にあっては，線質の違いを積極的に表現することで，異なった雰囲気の作品になることを学習する。自分の選んだ言葉には，どのような線質が合致するのか，また，鑑賞する際には，それぞれの作品がどのような線質で表現しようとしているのかに注目することで，筆者の意図をくみ取ることが可能になる。

本実践では，積極的に線質の違いを表現するために，筆以外のもので書いても良いことにしたところ，3名の生徒が，紙を丸めたり，木べらを使ったりしながら書く姿が見られた。こうした実験的な姿勢は大切ではあるが，発展性はあまりない。用具・用材への理解と，運筆の学習を通して表現の幅は広がっていくだろう。

今回の作品の線質や構成を洗練させていくためには，自分の表現意図に沿った書の古典の学習を進めていく必要がある。最後のまとめの授業で方向性を示しているが，表現意図に合致する古典をそれぞれ紹介し，今後の学習への意欲を喚起したつもりである（図8）。書の世界は広く，書き方のパターンは出尽くしていることを理解してくれたものと思う。

Ⅶ. 今後の課題

学習指導要領の今回の改訂では，書道Ⅰにおいて「漢字仮名交じりの書」が必修になり，「漢字の書」および「仮名の書」が選択になったのは，生徒の興味関心を引き出し，主体的な活動に発展させていこうという意図があると解釈している。本実践では，「漢字仮名交じり文」に限定することなく，「言葉探し」を設定したが，生徒の主体的な活動を書作品として表現しようとする意図は同じである。これまで，古典の臨書→倣書→創作と展開していた学習の流れを転換し，まず書いてみる。その中に「作品の良さ（＝個性）」を見いだすことができれば，古典に還っていくという流れによって，この「作品の良さ」を洗練していけそうである。今後は，個性を洗練していく段階での実践を行い，こうした学習の流れの検証を行っていきたい。

この書道Ⅰにおける「漢字仮名交じりの書」の必修は，中学校国語科書写との連接について一層の緊密化を図るねらいがある。中学校国語科書写にあっても，「漢字仮名交じり文」の書写力の育成を学習の中心に据えて，取り組んでいかなくてはならないだろう。「言葉探し」と同様の活動を取り入れるなど，国語学習との関連を意識しながら，主体的な学習を展開していきたい。

生徒それぞれが違った古典や題材を選択して活動する。そうした授業形態への対応として，機器や書籍も含めて，生徒が主体的に活動できる環境整備が必要になる。生徒の要望にどう対応できるか，今回の学習指導要領の改訂は，教師に対して意識の転換を求めるとともに，大きな課題を突きつけている。

これからの書道授業を構築していく上で「主体性」「個性」「創造性」と三つの課題を提起したが，これらは一つずつ解決されていくべきものではない。授業では，これらが常時絡み合い，相互に作用し合いながら相乗効果として機能していく。この三つを包括する活動を繰り返すことが，やがて，生徒の生きて働く力となっていくものと考える。

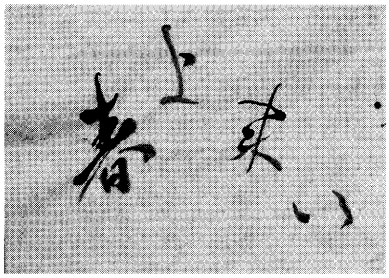
書道を通して「感性を育成する」ことは，まず，互いの良さを認め合うことからはじまる。われわれ日本人は，関わりの中で生活しており，欧米でいう確固とした「個人」として生きていくことは難しい。それぞれが自分の良さに気づき，それを洗練させていくことを通して，「その人らしさ」が表出していくものだと思う。手書き文字にあっても，「その人らしい」文字を書いていくために，学習者相互の関わりを生かすような学習課程の構築を目指していかなければならない。

参考文献

長野秀章「これからの書道教育(1)～(9)」『中等教育資料』1999年11月号～2001年11月号

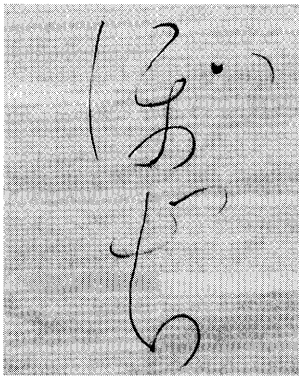
図8　生徒作品および今後選択して学習する古典の方向性

漢時代の隷書を学習し，字形と線質を洗練させる。



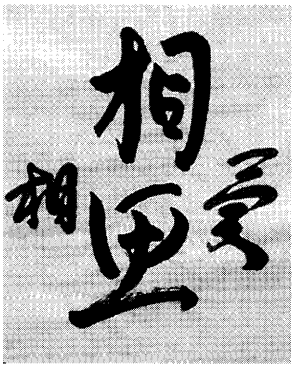
王羲之のオーソドックスな作品を学習し字形と線質を洗練させる。

新時代の『莱子侯刻石』などを学習し，線質を洗練させる。



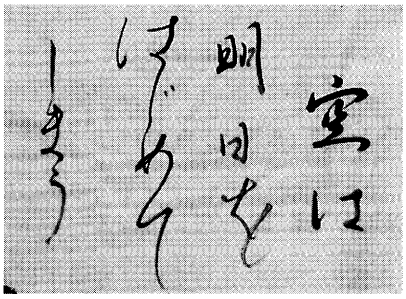
懐素『自叙帖』もしくは良寛の作品を学習し，線質や，構成を洗練させる。

鄭道昭筆『鄭羲下碑』などを学習し，線質を洗練させる。



空海筆『灌頂歴名』などを学習し，字形と線質を洗練させる。

蘇東坡筆『黄州寒食詩巻』などを学習し，線質を洗練させる。



平安時代の仮名を学習し，平仮名部分を洗練させる。